

## 春の雨

生暖かい雨が、春の淡い夜空を舞っている。  
行き重なるテールランプの光が色とりどりにざわめき、握りしめた傘の柄にまとわりついて、万華鏡のように左へ右へと揺れた。

イヤホンから、赤松林太郎の「フランスの詞」が流れてくる。過ぎ去った時間が落としていった愛の雫を、儂い音たちがけなげに拾い集めてきて、痺れるほどに痛い。足を速めた私を追いかけるように、雨が強くなってきた。

春の雨は時に、その優しいあたたかさに似合わず、追憶の欠片を残酷に呼び起こす。こんなに痛むなら、記憶など残らねばよいのに。こんなに苦しいなら、ひとつの季節にとどまりつづければよいのに。ひりひりとした痺れを切らすこともなく、音の粒が耳に刺さる。

巧みに編まれた物語があまりに美しく、春のぬるい雨は、憂愁を深く濃くにじませる。逃げて逃げても、雨音が心の奥に忍び寄る。

「余は雨に降りこめられた国の王だ」

赤松のアルバムの中で、生暖かな春の雨が降りつづく。

(2021年3月 加藤哲礼)